

本薬師寺の調査

— 第143 3次

2 検出遺構

1 はじめに

今回の調査は、檀原市城殿町における住宅建設にともなう事前の発掘調査である。調査区は本薬師寺金堂の北西約100mに位置する。平城薬師寺の伽藍配置から想定すると、おおよそ南北棟の西僧房、東側柱周辺に相当する(図114)。

本薬師寺跡はこれまでの発掘調査のなかで、金堂・東塔・西塔・中門・南面回廊などについてそれぞれ重要な調査成果を挙げてきた。しかしながら、僧房に関しては城殿町の集落内に位置することもあって、詳細な様相は判明していない。今回の発掘調査は、133 3次調査に続く2回目の僧房域にかかる調査である。調査は2006年7月18日に開始し、8月4日に終了した。調査面積は57㎡である。

調査区の基本層序は、上から耕土及び床土(約40cm)、凝灰岩片を含む中世の遺物包含層の灰褐色土(約15~30cm)、地山の順。調査区内は地山面で自然流路が大きく蛇行する。古代の遺構は井戸SE445を確認したのみで、西僧房に関わる遺構は検出できなかった。本薬師寺造営に関わる整地層は後世に削平されたと考えられる。井戸SE445 調査区中央部東壁際で検出した。南北に蛇行する自然流路を分断して井戸掘形がある。井戸枠は抜き取られており、最下面で井戸枠痕跡とおぼしき南北74cm、東西40cmの長方形を呈する浅い落ち込みを確認した。井戸枠採取穴は不整形円形で、長さは南北約2.4m、深さ約0.8m。採取穴の埋土からは飛鳥期に比定できる鉢Bや完形の三重弧文軒平瓦および丸瓦が出土した。南北溝SD446 調査区北東部で検出した。中世の南北溝である。幅3.4m、深さ0.5m。埋土からは少量の中世の

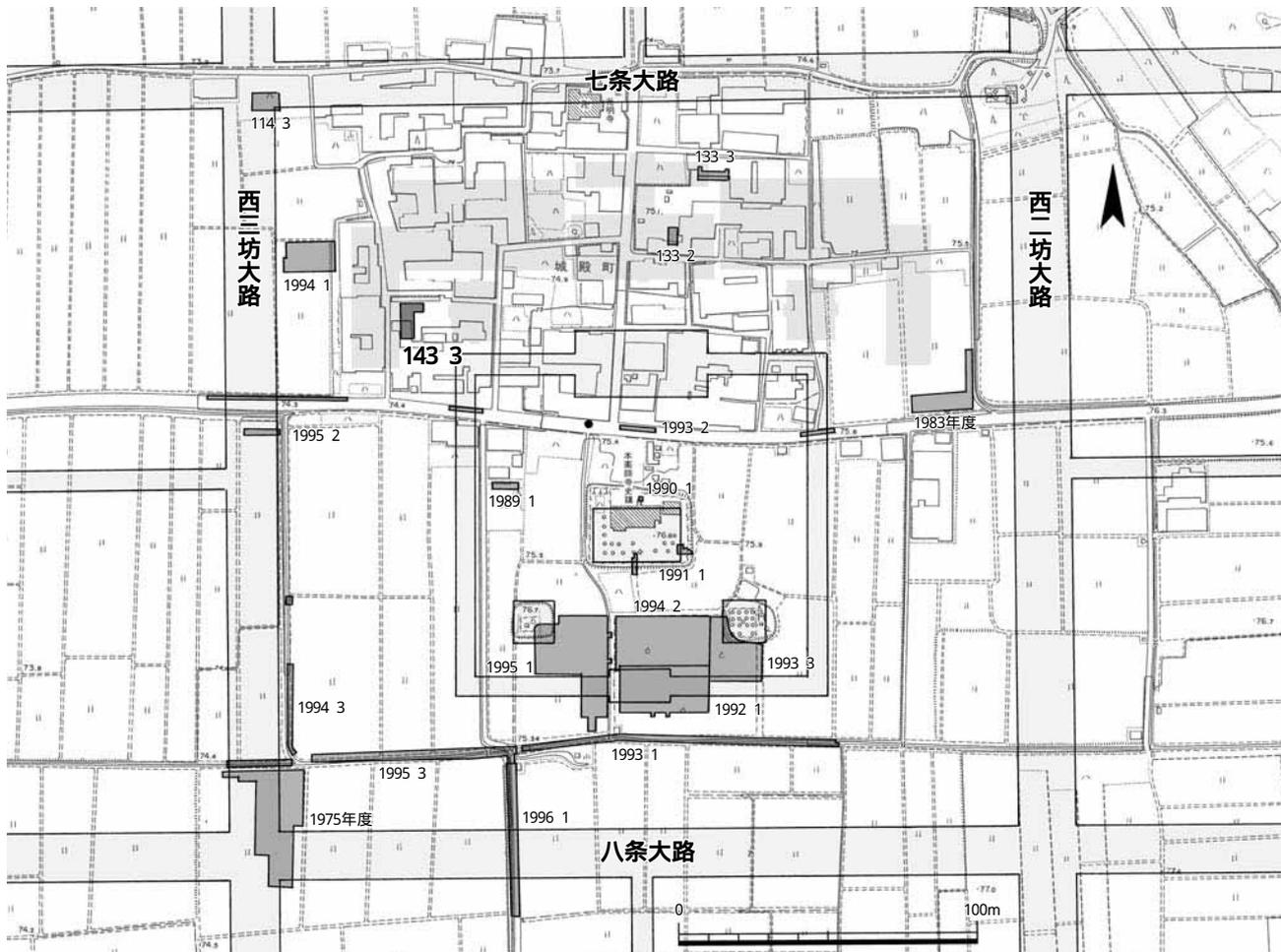


図114 第143 3次調査位置図 1 : 2500

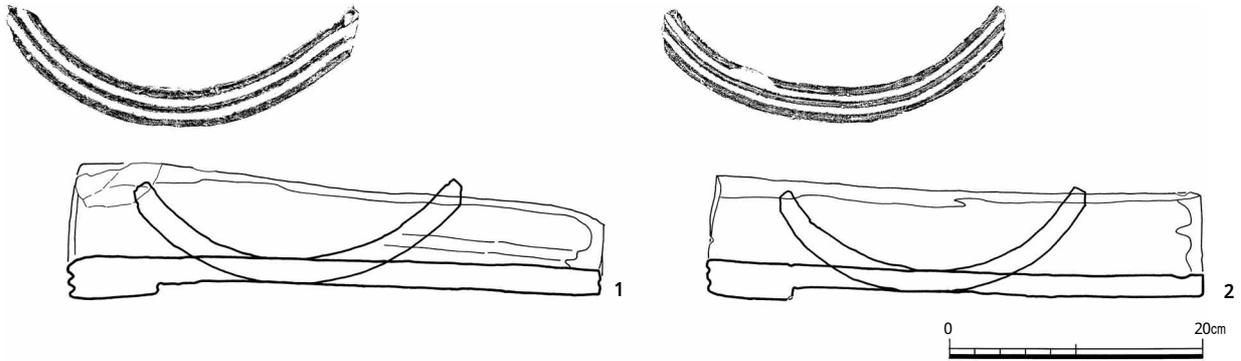


図115 SE445出土三重孤文軒平瓦 1 : 6



図116 第143 3次調査出土軒丸瓦 1 : 3

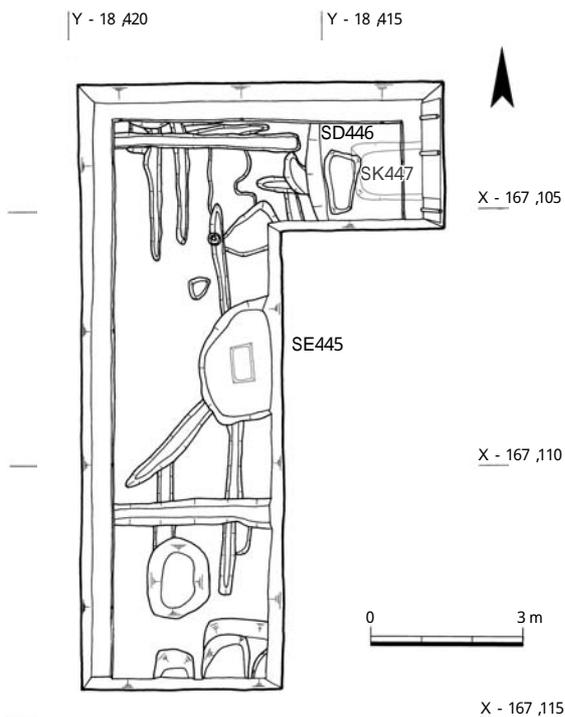


図117 第143 3次調査遺構図 1 : 150

土器が出土した。本調査区北東約120mに位置する133 3次調査区では、中世の環濠と考えられるSD440・441を検出している(『紀要 2005』)。しかし、これらが断面V字型を呈するのに対し、SD446は断面皿形で浅いことから一連の環濠とはみられない。

土坑SK447 SD446の下から検出した。南北1.2m×東西1.5m以上、深さ0.25mの方形土坑。出土遺物はなく、時期は不明である。

3 出土遺物

瓦類 古代の瓦は、軒丸瓦2点(6276型式A種1点、6276型式E種1点)、軒平瓦7点(6641型式H種3点、三重孤文2点、不明2点)、道具瓦22点(熨斗瓦20点、隅切瓦2点)があり、丸瓦214点(52.1kg)、平瓦619点(56.0kg)が出土した。軒瓦はいずれも本薬師寺の創建瓦である。灰褐色土より出土した6276Eは、外縁に線鋸歯文を配する複弁八弁蓮華文軒丸瓦(図116)、小振りで裳階用の軒丸瓦と考えられている。6276Eは瓦当の厚さが薄型と厚型とがあり、連子周環が表出される薄型のほうが先行するとされているが(『年報 1997 - II』)、本資料は瓦当厚1.8cmと薄型に属する。裏面は縦方向に指ナデし、側縁には范の被りの痕跡が残る。軒平瓦で特に注目できるものは、井戸SE445採取穴より出土した2点の完形の三重孤文軒平瓦である(図115)。いずれも粘土板桶巻作りで、大きさや調整が似ているものの、重孤文の挽き型が異なる。1は、弧線が丸みを帯び、凹線は断面V字型である。凸面の調整は縦縄叩き後、横ナデ。全長42.5cm、瓦当幅27.6cm、瓦当厚3.0cm、顎部長7.0cm、顎の深さ0.8cm。色調は黒灰色。2は凹線が浅く、弧線は扁平である。凸面の調整は縦縄叩き後、横ナデ。全長39.5cm、瓦当幅27.0cm、瓦当厚

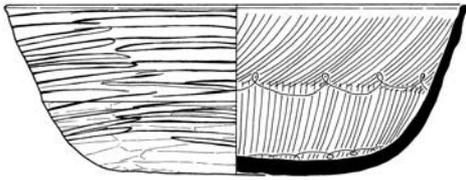


図118 SE445出土土器 1 : 4

2.6cm、顎部長6.8cm、顎の深さ1.0cm。色調はにぶい黄色。三重孤文軒平瓦は、これまでの調査でも出土しているが、完形品の出土は初例である。ただし重孤文の挽き型については、1・2ともにこれまでの調査で出土している三重孤文軒平瓦のそれらと一致した。他には、軒瓦や丸・平瓦の出土量に対し、熨斗瓦の出土量が多い点が注目される。

(石田由紀子)

土器 土器の総量は整理箱で3箱出土した。土師器、須恵器を中心に、弥生土器、瓦器、陶磁器などがある。このうち井戸SE445の井戸枠採取穴からは、磨耗が少なくほぼ完形の土師器の鉢と甕が出土した。鉢B(図118)は漆塗りで、内外面ともに暗褐色を呈する。底部外面はケズリ調整、口縁部内面には連弧暗文をもつ飛鳥に属するものである。口縁が若干ゆがむため口径は23.8~24.7cm、器高は9.0cm。甕は現在整理中だが、把手が複数出土している点や、口縁片はいずれも口径20cm程度である点から複数個体の甕Bに復元できる。これらは使用された痕跡があり、底部内面には最大で厚さ約5mmのコゲが付着している。しかし、外面は熱による損耗が少なく、使用した回数は少なかったとみられる。年代は鉢と同時期とみて問題ない。

飛鳥・藤原で井戸から甕が出土する例は、藤原宮西方官衛SE8061のように口径15cm前後で把手の付かない甕Aが多数出土する場合と、同・SE1205のように口径20cm程度で把手の付く甕Bが、少量ではあるが主体を占める場合があり、今回の例は後者にあてはまる。甕Aと甕Bは把手の有無や大きさの違いの他にも、概して甕Aの方が外面にススがよく付着する特徴がある。それらは内容物や火処の違い、ひいては遺構周辺の性格の違いに起因する可能性がある。本例もその違いと、甕の廃棄に至る過程や契機を考えるうえで興味深い。

(加藤雅士)

その他 瓦、土器以外の遺物としては凝灰岩の破片、片岩の破片、銅滓、炭などが出土している。凝灰岩片は遺構および遺物包含層からコンテナ2箱分が出土している



図119 第143 3次調査区全景(北から)

が、とくにSE445からまとまった量が出土している。中には長辺19cm、短辺17.5cm、厚さ13cmを測る切石の破片が含まれており、基壇を外装する際に出た不要な切石凝灰岩片を捨てこんだ可能性も考えられる。また、片岩の破片は長さ8.5cm、幅6.5cm、厚さ2.7cmの薄い板状品である。石敷等に使用された可能性がある。銅滓は遺物包含層から小片2点が出土した。炭はSE445から小片2点が出土した。これらのほかに、遺物包含層から板状の不明鉄製品が1点出土している。

(豊島直博)

4 まとめ

今回の調査では、133 3次調査に続き僧房域にかかる2回目の発掘調査であったが、本地点においても僧房に関わる遺構は確認できなかった。しかしながら、遺物包含層に凝灰岩片が含まれることや、調査面積の割に出土瓦の量は多く、またその多くが本薬師寺の創建瓦であることから、近傍に瓦葺建物が存在した可能性は高い。

また、井戸SE445は西僧房の想定位置にかなり近接しており、平城薬師寺の伽藍配置から考えるとおおよそ僧房の基壇外周部にあたる。SE445の井戸枠の採取穴からは飛鳥期に属する土器をはじめ完形の軒平瓦や丸瓦が出土しており、これらはいずれも磨耗が少なく時期的にもまとまりがあるので、短期間に一括で廃棄されたとみてよい。従ってSE445は本薬師寺の造営中に廃絶されたと推測される。しかしながら、本薬師寺造営に伴う整地土が残存していないため、この井戸が西僧房の造営に伴って埋め立てられたのか否かは不明である。今後の周辺調査に期待したい。

(石田)